

特性、対処法記す サポートブックを

発達障害、自閉症の子ども 誤解招かぬよう

発達障害や自閉症の子どもは、強いこだわりやコミュニケーションの難しさによって周囲から誤解を招くこともある。そんなとき、子どもの特性や対処法をファイルなどにまとめた「サポートブック」を作り、学校やボランティアなど預け先に渡すと理解も進む。サポートブックは標準的な書式がないため、各家庭で工夫して作るよい。

(貝沢貴子)

サポートブックは、NPO法人「ふぁみりいNOTE」(香川県丸亀市)の丸岡玲子理事長(55)が1999年に発案。自閉症と中度の知的障害がある長男の宣博さん(30)が、親

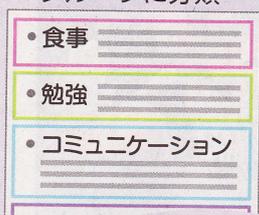
項目別にまとめ学校、預け先へ

●サポートブックの作り方の一例●

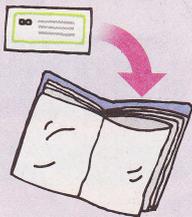
① 子どもの特性や対処法を書き出す

- 熱い食事が苦手
- 長い文章は読めない
- 具体的に指示しないと行動できない

② 出てきた項目をグループに分類



③ グループごとに紙に書き、クリアファイルなどに入れて渡す。相手先によって項目を差し替えるとよい



エピソード交え具体的に

や学校教師ら日常接する人以外に、初めて会う支援者にもすぐ理解してもらえようようにと作成したのが始まりだ。評判を呼び、利用

者には全国に広がった。丸岡さんが著書で紹介しているサポートブックは、コミュニケーションの取り方やパニック時の対応など項目ごとに簡条書きに記していく。対処法の記入欄は目立つよう色分けされ、初対面の支援者でも一目で分かりやすいのが特徴だ。

サポートブックは、子ども本人が周囲から理解を得られるだけでなく、家族と支援者の

情報共有にも役立つという。丸岡さんは「支援者にも書き込んでもらえば、親には見せない子どもの一面を知ることができる。親が子どもを客観的に見つめるきっかけになりま

す」と語る。書式を工夫し、オリジナルのサポートブック作りに取り組む人も少なくない。

10日、障害児教育に詳しい相模女子大(相模原市)子ども教育学科の宇田川久美子准教授を招き、サポートブックの作成講座を開催。丸岡さんの方式では、準備段階で作る資料に記入する項目があらかじめ設定され、内容も大まかなため、受講した母親たちからは「何を書けばいいか具体的なイメージが湧きにくい」という声が出た。全員で話し合った結果生まれたのが、子どもが日常生活を送る上での特性や対処法を思い浮かべ書き出し、各項目を「食事」「勉強」などのグループに分け、必要に応じ整理・清書してクリアファイルなどにまとめる方式だ。子どもが朝起きてから登下校し夜眠るまでの、一日の生活に沿って考えたと書きやすい。宇田川さんは「本人の気持ちを代弁するのがサポートブック。子どもがどんなことに困るのか、具体的なエピソードを書いてほしい」と話す。

インターネット上で作成できるサポートブックもある。システム開発会社「奥進システム」(大阪)が、昨年3月から無料で公開しているウェブサイトを「うえぶサポート」(<http://support-book.jp/>)だ。登録するとIDとパスワードが与えられ、パニック時の対応法や食事、トイレなどの注意点を書き込む。紙に記入するのは違い、書き換えが容易なことなどが利点だ。学校やボランティアなど支援者に特定のアドレスとパスワードを伝えると、パソコンなどで必要ときに閲覧してもらえ、相手によって公開する情報を変えることもできる。印刷して預け先に渡してもよい。

同社によると、これまでの登録人数は650人で、全国からアクセスがあるという。同社は「標準的な書式として多くの人に使ってもらえれば」と話している。